オートメ技術で日本企業と提携

エレクトロバート社副社長
ピーター・M・フォドー

日本人は、西欧社会が発明したものを採り入れ、それに手を加え、革新してきた。技術革新の才能と生産性向上の努力こそ、日本が繁栄する偉大な国となる鍵である。現在、日本の産業界で進行しつつある技術革新は、やがて全世界の電子工業を激変させるにちがいない。

エレクトロバート社はこれまで、日本で用いられているオートメーションの革新的技術や方法から多くのことを学んできた。そして当社の製品は、日本市場だけでなく、オートメ化を追求する世界各国に受け入れられるものとなった。

当社は、日本電気を通じて、遠く米国やブラジルにその製品を売り、また日本電気以外にも日本側各社との接触を通じて、中国やオーストラリア、マレーシア、西ドイツなどに製品を送っている。

また当社は、日立や松下、日本電気、富士通、ソニーといった日本の大手メーカーに、プリント基板製造工程の自動化技術を提供している。世界各地に散らばる日本の大手メーカーの子会社や関連会社もこの技術分野では当社の大切なお客である。

エレクトロバート社のプリント配線回路組立用はんだ付け装置。

日本におけるわれわれのこれまでの活動、上述したような企業との協力関係により、エレクトロバート社は日本企業の海外におけるターンキー方式のプロジェクトに参加する機会をふやすとともに、日本と先進工業諸国の間に存在するコミュニケーション・ギャップを幾分なりとも埋める上でお役に立っていると思う。

一九六四年、私が日本に着いたその日から、私は大の日本びいきになった。私は日本でたくさんの友人を得、東京、大阪、名古屋、そのほか日本全国どこの都市に行っても全くくつろいだ気分になる。東と西が互いに理解し合い、経済的にも文化的にも手をつなぐ必要があるのは言うまでもない。そして、世界の調和と平和につながるような緊密な相互理解を築けるのは、昔から第一にビジネスマンと相場が決まっている。

エレクトロバート社が日本で活動を始めてから、早や十五年。この間、日本はわれわれの努力をオープンな態度で受け入れてくれた。こうした日本で営業活動を行うことは、楽しみが大きく、また成果も限りなく期待できる。

日加石油化学小委員会について

三菱油化常務取締役
首藤　勤

一九八〇年五月、私は初めて、京都で開かれた第三回日加経済人会議に参加した。何の予備知識もなく勧められるまま出席したが、偶々その時から日加石油化学の会議がスタートした。

この会議には、カナダ側から工業製品分科会共同議長のニューオール氏（デュポン・カナダ社長）、石油化学スポークスマンのモートン氏（前エッソケミカル・カナダ社長）はじめサザランド氏（AGE副社長）ほか数名、また日本側からは住友化学工業の堀氏と私、丸紅の池田現社長などが参加して、両国の石油化学産業について初めて活発な意見交換を行なった。

カナダの業界と二度目の出会いは、その年の十月。トロントで日本石油化学工業協会（JPIA）の原料調査団とカナダ化学製造者協会（CCPA）との間で、原料問題中心の討議が行われ、CCPAのベランジャー会長の司会のもと、双方の問題意識を理解しあった。

あけて一九八一年五月、バンクーバーで開かれた第四回日加経済人会議では、石油化学小委員会がもたれた。同委員会は個別討議の中で最も実のあるもののひとつであった。回を重ねてきた結果、お互いの気心も知れ、何よりカナダ側リーダーのモートン氏による事前準備が効を奏したこともあって、十分なディスカッションがなされた。この回のハイライトは、渡辺三菱化成工業常務からなされた、対日輸出に対する明確な問題提起だったと思う。

石油化学小委員会の日本側メンバー。左端が首藤氏。

続いて本年一月、東京で日加双方の石油化学協会による中間会議が行われ、両国政府及び業界の動き等に関する情報交換とともに、通商問題についての討議が重ねられた。

今度札幌で開かれた第五回日加経済人会議は、石油化学メンバーにとっても五回目の会合であった。わずか二年の間に両国業界の集まりが五回もたれているということは、日本の石油化学工業協会にとっても異例のことである。両国の石油化学業界の人びとが、相互の関係についていかに深い関心をもっているかを、このことはよく物語っているといえよう。

両国の関係者が、より緊密な協力関係を築いていくことを切に望んでいる。